ホステリングマガジンvol.8 / 2017 Spring

JAPAN Youth Hostels, Inc.

Hostelling Magazine

言葉の壁、文化の壁を乗り越えた先にあった、

私だけの「個性」

女優 藤井 美菜

Hostelling Magazine × 地球の歩き方 www.arukikata.co.jp

アンダマン海の真珠プーケットと島々を旅する

プーケットと周辺の島々（タイ）

トリップアドバイザー®

プーケットの人気ビーチ／人気ラフティング／人気自然＆野生動物ツアー

Youth Hostel Pick up

最高のアウトドアフィールド 奈良・五條へGO!

モンベル五條ユースホステル

この冊子は、宝くじの社会貢献広報事業として助成を受け作成されたものです。

あなたに夢を。街に元気を。 クーちゃん 宝くじ

公式webサイト
ランチパック 検索

公式Facebookページ
www.facebook.com/lunchpack.jp

スマートフォン用アプリ ランチパックCLUB 検索
[Google Play] [App Store] からダウンロード

直木賞作家・乃南アサの
ベストセラー小説、
待望の映画化。
林遣都×市原悦子の初共演。
雄大な自然に囲まれた村で、
孤独な青年は〝愛〟にふれる。

しゃぼん玉

これからが、これまでを変えていく。

林 遣都　藤井美菜　相島一之　綿引勝彦　／　市原悦子

原作：乃南アサ『しゃぼん玉』（新潮文庫刊）　主題歌：秦 基博「アイ（弾き語りVersion）」（OFFICE AUGUSTA）　脚本・監督：東 伸児

2016年/日本映画/108分/カラー/1:1.85/5.1ch　公式HP：www.shabondama.jp

©2016「しゃぼん玉」製作委員会

3月4日㊏ シネスイッチ銀座ほか全国公開

Vision

Principle and Philosophy

Inclusivity
世界を超えて

Learning and Understanding
考えよう

Sustainability
僕らと子ども達の未来のことを

日本ユースホステル協会はユースホステルのビジョンに基づき、日本国内にユースホステルを設置・運営すると共に、国際ユースホステル連盟や各国のユースホステル協会と協調し、知見を広める「旅」を促進する活動を行っています。

Line up

インタビュー …… P02
女優／藤井美菜
言葉の壁、文化の壁を乗り越えた先にあった、私だけの「個性」

Youth Hostel Pick up …… P10
最高のアウトドアフィールド
奈良・五條へGO!
モンベル五條ユースホステル

Hostelling Magazine × 地球の歩き方 … P14
アンダマン海の真珠
プーケットと島々を旅する
タイ
■タイのグルメ／おみやげBest 5

トリップアドバイザー Presents …… P18
耳寄り! 観光NAVI
プーケットの人気ビーチ／人気ラフティング／人気自然 & 野生動物ツアー

gtg …… P20

教えて! 旅GIRL …… P21

Event Information …… P22

※本紙の情報は2017年2月20日現在のものです。変更になる場合がありますので、お出かけの前に現地にお確かめください。

発行所 一般財団法人日本ユースホステル協会
編集・発行人 水野 宰
TEL.(03)5738-0546
〒151-0052 東京都渋谷区代々木神園町3-1
国立オリンピック記念青少年総合センター内

※本誌掲載記事の無断転載を禁じます。

制作・印刷製本/サンメッセ株式会社

言葉の壁、文化の壁を乗り越えた先にあった、

私だけの「個性」

女優 藤井美菜

日本と韓国。2つの拠点で、数々のドラマや映画、CM、
テレビ番組などで活躍する女優、藤井美菜さん。
2016年には、韓国の「ソウルドラマアワード 2016」で
「アジア女性スター賞」を受賞し、
日本のみならず韓国においても、人気女優の一人として
唯一無二の存在感を放っています。
アメリカで生まれ、1歳からは日本で暮らしていた彼女が、
韓国で活動をすることになったきっかけとは。
「知的な美人」という第一印象とはまったく異なる「意外な素顔」を、
インタビューを通じてご紹介します。

自分以外の人生を生きられるって、面白い！

Q. 女優を目指すきっかけは何だったのでしょうか？

9歳のときに、当時住んでいた新潟県の市民ミュージカルのオーディションを受けたのが、今思えば最初の一歩だったのかな。当時は習い事をひとつ増やすくらいの感覚で、引っ越ししたばかりだったのでお友達が増えると良いなぁ……くらいの（笑）、軽い気持ちでした。でも、その市民ミュージカルで演技の基礎の基礎からみっちり教えていただく中で、「演じることで自分以外の人生を生きられるって面白いんだな」と思うようになっていって。中学生の時に「もっと演技の勉強を続けたい！」「活動の幅を広げるために東京に出たい！」と考えるようになったんです。両親に相談したら、「首都圏の高校に合格できたら、新潟から東京に出ていいよ」と言われ、目標が明確に定まってからの3年間は猛勉強の日々でした。その結果、無事首都圏の高校に合格することができて、上京して本格的に芸能活動を始めました。

Q. その時は、ご家族揃って上京されたんですか？

私は一人っ子なので、母が私についてきてくれました。父は仕事の都合で新潟に残ったので、“逆単身赴任”のようになってしまって（笑）。私の大学進学のタイミングで母は新潟に戻りましたが、一人暮らしを始めてからも、韓国でお仕事をするようになってからも、活動を応援してくれるので本当にありがたい存在です。

自分だけの個性を模索する日々でついに見つけた「新たな道」。

Q. 現在では堪能な韓国語を活かして、数年前から韓国で大活躍されていらっしゃいますよね。韓国語を学ぼうと思ったきっかけについて聞かせて下さい！

私が韓国語を学び始めたのは、大学に入ってからでした。ちょうどその頃、韓流ドラマの『冬のソナタ』がきっかけで韓国のエンターテインメントに興味を持っていたので、大学の第二外国語で韓国語を選択したんです。それからどんどん語学の勉強に没頭していって、大学で2年間勉強した後は、3年ほど語学学校にも通って、マンツーマンレッスンを受けました。

Q. 5年間も！初めて韓国でお仕事をされる時は、韓国語はもうペラペラだったんですか？

ネイティブの方の韓国語が100%だとしたら、おそらくその頃は25%以下だったと思います……（笑）。「5年間も勉強したし、語学学校の先生とも楽しく会話ができるようになってきたから、きっと韓国に行っても通じるはず！」なんて思っていたんですけど、大きな勘違いでした……。
いざ韓国で自分の覚えた韓国語を使ってみて気づいたんですけど、語学学校の先生は日本人が間違えやすい韓国語を把握しているし、日本語も分かった上で話を聞いてくれるから、こちらの意図をくみ取る能力が高いんですよね（笑）。だから、語学学校と同じ話し方で話しても、撮影現場では全然通じない、なんてことが何度もありました。自分が伝えたいことが伝わらないもどかしさで、韓国でお仕事を始めた頃はよく泣いていたなぁ……（笑）。初めての韓国でのお仕事が日韓合作のドラマだったのですが、当時は撮影現場独特の言い回しや監督の言葉が全く分からなくて。「ちょっと後ろに下がって」とか、「右向いて」といった簡単な指示すら理解できず、手取り足取りスタッフの方々に身体を動かしてもらうような状態で（笑）。でも、悔しい思いやもどかしい思いをした日々は、今振り返れば“大事な時期だったな”と思います。

Q. そんな苦労があったんですね…。挫折を経験されても、韓国での活動を続けてこられたのはなぜですか？

大学時代から憧れていた韓国のエンターテインメントの世界でお仕事をさせていただくチャンスが舞い込んだことが、嬉しかったし楽しかったんだと思います。
実は、日本で17歳から本格的に女優としてデビューして、お仕事と学業を両立させながら続けていたんですけど、大学3年生の頃が自分の中で一番のスランプで…。なかなか思うようにお仕事が決まらなかったり、現場で気持ちが折れてしまったり、色々なことがあったんです。そんな中でも、韓国語の勉強は、直接的に仕事に繋がるとは思わないまま、「時間もあるし、何かに没頭したいし……」という思いで頑張り続けられたんです。だから、韓国語をきっかけに道がつながって、日韓合作ドラマの出演が決まったときに、初めて自分の確立した個性を見つけられた気がして。「自分にしかないものってなんなんだろう？」と迷っていたときに新

成人式の時には赤い振り袖を。
母に記念写真を撮ってもらいました。

たな道が開けたからこそ、それをちゃんと大事にしていきたいし、ちゃんと形として残していかなきゃいけない。そう思えたから、どんなに悔しくて泣いても、続けてこれたんだと思います。

韓国の現場で学んだ、コミュニケーションの大切さ。

Q. 韓国のエンターテインメントと日本のエンターテインメントの違いってありますか？

文化の違いももちろんありますが、特徴的なのは感情表現の仕方ですね。韓国は日本よりもはっきりしています。ドラマや映画にもそれが表れていて、喜怒哀楽が激しかったり、ちょっとドロドロした人間模様が描かれる作品が多いと思います。その違いが私にとっては衝撃的でしたし、エンターテインメントとしてとても面白いと感じます。でも韓国の人も日本の感情表現が面白いようで、日本の映画やドラマは人気があります。自分たちの国にない「味わい」があるからこそ楽しめる部分があるんじゃないかなと思います。

Q. 日本と韓国では演じ方も異なるのでしょうか？

そうですね。私はまだ韓国人の役を演じられるほどの語学力がないので、韓国では日本人や外国人の役を演じているのですが、韓国のドラマの日本人役と、日本のドラマの日本人役では、“感情のぶつけられ方”が韓国の方が大きいと思います。同じ『日本人役』とはいえ、「大きな感情をぶつけられたときには心がどう動くだろう？こっちの感情も大きくなるかもしれないな」……といったことを考えながら演じています。見比べると韓国ドラマの私の方が全体的にトーンが大きいかもしれませんね。

Q. 韓国で活動されるようになってから、価値観や考え方に変化はありましたか？

昨年、第11回ソウルドラマアワード2016年で
アジアンスター賞をいただきました。

一番感じたのは、“コミュニケーションの大切さ”ですね。元々人見知りな性格なんですけど、韓国で活動し始めて間もない頃は、韓国語がまだ完璧に通じないこともあって、「気持ちだけでも伝えなきゃ！」って、すごく頑張っていたんです。
すると、その後日本に戻ってお仕事をすることになったときに、「『人見知りだから』『コミュニケーションが苦手』なんて思っていたけど、言葉の壁がないなら、何も難しいことはないじゃん！」と思えるようになっていて。日本のお仕事にも、韓国で学んだことが活きるようになりました。

語学上達の秘訣は「羞恥心を捨てること」。

Q. どうすれば外国語を使いこなせるようになるのでしょう？語学を身につける上での秘訣があれば、ぜひ教えていただきたいです！

私も今英語の勉強を始めていて、心が折れそうになりながらなんとかやっているんですけど（笑）、韓国語を勉強していた時を振り返ると、やっぱり、「楽しむこと」と「続けること」が大前提にあると思っています。韓国語を学んで感じたのは、語学はある日突然上手くなるものじゃなくて、じわりじわりと伸びていくものなんですよね。なかなか自分の思うように上達しなくても、辞めてしまうのはもったいないと思います！あとは、その言葉を話せるお友達を作ったほうが、結局上達のスピードが早いことに最近になって気づきました（笑）。「この人と話してみたい！」という気持ちになれば、下手でも頑張れたりするんですよね。
でも英語の勉強は韓国語を勉強していた時よりも楽しんで出来ていると思うんです。一回韓国語を習得して分かったことなんですけど、「間違えても通じればイイや！」って（笑）。多分、日本人って、「イントネーションとか文法が間違っていたら恥ずかしい……」なんて思いが先走って、言葉が出てこなくなってしまうことが多いと思うんです。あれこれ考えて、言葉が出て来たときには話題が変わってるみたいな（笑）。
でも、それをまず飛び越えて、羞恥心など捨てて（笑）、「単語でもいいから伝えてみよう！」というタフな心が大事なんだなって最近になって思うようになりました。羞恥心を捨てるのも難しいんですけどね（笑）。

Q. 夢の中でも韓国語を話していたり、なんてこともあるのですか？

韓国にいる時はそうですね。長期で滞在している時に親と国際電話で話をしたりするんですけど、その時は日本語の単語が出てこなくなったりすることもあったり。日本語と韓国語の切り替えが難しく感じる時もあるんですよね。「通訳さ

んの頭の中ってどうなってるんだろう?」って思います(笑)。

地上波ドラマデビュー作品が、韓国での活躍のターニングポイントに。

Q.今回のインタビューでは、藤井さんのプライベートな姿にも迫ってみたいと思います! 韓国に長期滞在されているときは、一人暮らしをされているそうですね。韓国料理のレパートリーも増えましたか?

実は、普段あまり料理をしないタイプなので、韓国では一人で外食することが多いです(笑)。でも私、文化の狭間にいます(笑)。韓国って一人で外食をしない文化があるらしいんですよ。日本だと、カフェで一人過ごしている方やごはんを一人で食べている方をよく見かけますが、韓国ではそれが珍しいらしくて。韓国の友達から電話が掛かってきて「今外で一人でごはんを食べてるよ」と話すと、「今どこにいるの?可哀そうだから行ってあげるよ!」って心配されちゃうんです。国によってはこんな文化の違いもあるんだなと思いつつ、今でもあまり気にせず一人でごはんに行っちゃいますけどね(笑)。

Q.現地ではどのように交友関係を広げていますか?

お友達の輪がどんどん広がっていって……ということが多いですね。なので、共演した女優さんや俳優さんだけじゃなくて、一般のお友達もたくさんできました!韓国ではバラエティ番組に出演することもちょくちょくあるのですが、以前『学校に行ってきます』という二泊三日の間、高校の生徒さん達に混じって授業を受けるという企画の番組に出演したときに共演したメンバーとは、一緒に過ごした期間が長かったのでとても仲良くなれました。今でもそのメンバーで定期的に集まっています。

Q.交友関係を広げるきっかけのひとつが、『学校に行ってきます』だったんですね!では、韓国での芸能活動の中で、一番のターニングポイントになったのは、どんな作品だったのでしょうか?

私の今の韓国での活動につながっていると思うのは、2012年に出演させてもらった『ドラマの帝王』という韓国ドラマですね。運良く「日本人役のオーディションがあるから受けてみないか」というお話をいただいたことがきっかけでした。その日本人の役というのが、日本に住んでいる女の子で、「韓国ドラマを見て韓国語を勉強したんです」と韓国人に話す役で「私と一緒じゃん」と思って(笑)。この作品が私の韓国での地上波ドラマデビュー作でした。韓国のドラマに出てくる日本人の女性の役は多くはないですし、不思議なご縁を感じています。この作品がきっかけで、視聴者の皆さん

ヘア:HIROKI(W)
メイク:EBARA(W)
スタイリング:Babymix
フォト:小林潤次

が私を知ってくださるようになりましたし、「あの番組を見てキャスティングしました」というオファーをいただくこともあるので、出演できたことは今でもありがたく思っています。

Q. ターニングポイントになった『ドラマの帝王』から数年を経て、作品へのアプローチの仕方に変化はありましたか？

2016年に、「ソウルドラマアワード」という祭典で「アジア女性スター賞」という賞をいただいたのですが、数年前まではドラマを「観る」側だった自分が今では「演じる」側になり、こうして評価していただけたことが本当に嬉しかったですし、さらに頑張ろうという思いも強まりました。現在は、「役の幅を広げたい」という思いが強いです。今までは、韓国では「ちょっと訛りのある韓国語を使う天真爛漫なキャラクター」を演じることが多くて、それが成り立っていたのですが、今後はもっとシリアスな役だったり、語学の壁に左右されない表現力が欲しいな、と。その方向性を模索中です！

Q. 現在英語の勉強をされているのも、その一環なのでしょうか？

そうですね。海外にはたくさんの面白い作品があるので、日本や韓国に限らず、関わるチャンスがあればどんどん関わっていきたいという欲求もすごく出てきていて。例えば、私が出演させていただいた韓国の『猟奇的な彼女2』という映画や、『私たち結婚しました』というバラエティ番組は、中国でも公開・放送されて認知度も高まっているようです。ここからまた何かご縁があれば、チャレンジしていきたいですね。

「自分だけがしっくりくる場所」を探す旅に出かけてみたい。

Q. 今回藤井さんがヒロインを演じられた映画「しゃぼん玉」は、直木賞作家の乃南アサさんのベストセラー小説が原作ですが、小説も読まれましたか？

映画の撮影で行った京都。撮影がお休みの日に、せっかくなので1人で伏見稲荷に行ってきました。紅葉がきれいでした。

オーディションの前に熟読させていただきました。“日本の小説ならでは”という第一印象でしたね。淡々としている中に、心の動きが現れる繊細さが魅力的で、「この小説が原作の映画なら関わってみたい！」という思いは、原作を読んだ段階から強く感じていました。

Q. 藤井さんはブログやインスタグラムでも、よく愛読書を紹介されていらっしゃいますよね。特にお好きな作家さんはいらっしゃいますか？

一番好きな作家さんはよしもとばななさんです。よしもとばななさんの作品は、ほとんどすべて読破していると思います。あとは、『博士の愛した数式』などで有名な小川洋子さんや、群ようこさんも……。特に意識はしていなかったのですが、以前読みたい本のラインナップを書き並べてみたら、たまたま全員女性の作家さんでした。文章のトーンが自分に合っているのかもしれませんね。

Q. そんな読書家な藤井さんに、ひとつご質問が。「読むと思わず旅に出かけたくなる本」を、Hostelling Magazineの読者に紹介していただけますか？

まず一冊目は、森見登美彦さんの『夜行』です。森見さんの作品は京都を舞台にされていることが多いのですが、この作品も京都が舞台。今関わっている日本と台湾の合作映画のロケ地が京都なので、「これは良い刺激になる！」と思って、京都に行く前や移動中に森見さんの作品を読むことが多いです。
あとは、よしもとばななさんの『スナックちどり』という作品もオススメです！この作品は、イギリスの有名な都市……ではなく、最西端の田舎町に主人公とその従姉妹が旅行に出かける、という物語。この作品を読んだときに、「こういう旅って良いなぁ」と思いました。みんなが良いって言ったり、みんなが写真を撮ったりするような場所の魅力はもちろんあるだろうけど、“自分だけがしっくりくる場所を探す旅”っていうのも素敵だな、と感じて。どこかで見たことがあるような風景じゃなくて、“自分のツボを刺激したい”という思いが強くなる作品です。

Q. 日本と韓国での活動でお忙しいと思いますが、オフの日に旅に出かけることはありますか？

実は、元々の性格はかなりのインドア派なんです（笑）。韓国は色んなご縁でこの4年間くらいは日本と半々くらいで生活させていただいているので、今はもう韓国に行くのは「旅」という感覚とはまた違うかも…。ただ、このお仕事をしていると、やっぱり感性を磨きたいし、いろんな刺激が人生を深めてくれると感じる機会が多いです。「自分の知らない世界を見る」ということに興味を持たなきゃいけないな……と、こ

ご数年で思うようになりました。
最近は京都でのお仕事が終わった後に時間を作って一人で散策したりして、ちょっとでも機会があれば知らない物に触れてみようと心がけるようにしています。

Q. ちなみに京都ではどちらに行かれましたか？

京都は伏見稲荷と東福寺に行きました。紅葉の時期の京都は初めてだったんですが、都会だと動かない心の一部が動いたというか、かなり感動しました！外国の方もたくさん来ていましたが、伏見稲荷はカップルが多くて…。私は誰も支えてくれない中、一人で山のてっぺんまで登って来ました（笑）。

Q. 海外ではどこに行ってみたいですか？

台湾に行ってみたいんです！王道ですが九份とかにも行ってみたいし、ご飯の美味しい所を一通り巡りたくて。中国茶とか小籠包とか、やっぱり本場で食べなきゃ（笑）。今、台湾との合作の映画に参加させていただいてるんですけど、全部関西での撮影なんです。なので「仕事に関連づけて台湾に連れて行ってください！」ってお願いしてます（笑）。
旅の醍醐味って、“知らなかったことを知ったことで、話の幅が広げられる”ってこともあると思っていて。私も韓国に行くまでは、自分が誰かと盛り上がれる話題は本のことぐらいしかないな、と思っていたのですが、韓国に行って韓国を知ることで、自分の幅も広がったのを実感しています。

台本に書かれていない「人生」を身体に染み込ませ、演じる難しさ。

Q. 映画「しゃぼん玉」のロケ地・宮崎県椎葉村（しいばそん）はどんな場所でしたか？

父の実家がお隣の福岡にあるんです。小さい頃は福岡の祖父母の家に行く事も多くて、「好きな食べ物は明太子！」って答えるような子供だったんですけど（笑）、宮崎は多分この映画の撮影で訪れたのが初めてだと思います。かなり山の田舎の方での撮影だったのですが、田舎ならではの人のあったかさや、距離の近さを感じて、滞在期間中はとても良い経験をさせていただきました。
私がロケ地に到着した次の日が、悪天候で撮休になって、丸一日予定が空いちゃって。「せっかくなら村を探検してみよう！」と思って散策している時に、あるお蕎麦屋さんに立ち寄ったんです。そうしたら、お店のおばあちゃんが、「この村には『平家祭り』というお祭りがあってね……」と、伝説を題材にした椎葉村のお祭りについて、こちらが聞く前に説明をして下さったんです。今回私が演じた美知は、この椎葉村で生まれ育った女性なんですけど、あるきっかけでこの村にた

Profile

藤井　美菜

1988年7月15日生まれ、新潟県出身。9歳の時に市民ミュージカルのオーディションを受け、小学校時代から舞台に出演する。高校進学後、本格的に芸能活動を開始。2006年公開の『シムソンズ』で映画デビュー。同年、第88回全国高等学校野球選手権大会の朝日新聞のポスター及び「ビクター・甲子園ポスター」キャンペーンのイメージキャラクターに抜擢された。2012年からは日本と韓国を行き来して活動、韓国のバラエティ番組「私たち結婚しました 世界版」、映画『もっと猟奇的な彼女』（16）に出演するなど、海外へ活躍の場を広げた。代表作に映画『女子ーズ』（14）、『デスノート Light up the NEW world』（16）など。

またま来た主人公の伊豆見君（林遣都）に平家祭りを紹介するというシーンがあったので、「リアルな村人はどういう風に説明するんだろう？」と思って聞いてたんです（笑）。そうしたら本当に自分の村のお祭りを大事に、丁寧に、説明してくださって。その様子を目の当たりにできたことは、その後の撮影に臨む上でとても参考になりました。このシーンを演じるときには、お蕎麦屋さんのおばあちゃんのように、生まれ育った村やお祭りへの愛情が表情や言葉から伝わるように意識していました。

Q. 試写を拝見しましたが、そんな美知の思いがスクリーンからひしひしと伝わってきました！

良かったー！きっと、あのときに出会ったおばあちゃんのおかげです！おばあちゃんだけでなく、村の方々は本当にあたたかい人ばかりでした。撮影のために2ヶ月くらいずっと滞在していたスタッフさんが東京に戻る日に、お世話になった宿のおばちゃまが泣いちゃったという話を後から聞いて。この映画に通じるというか、そんな距離感が映像に現れていると思います。

Q. 作り手の方々が椎葉村が好きなんだな、ってそんな想いが伝わってきました！

この映画の大きなテーマは「人を信じること」だと思うんです。おスマばあちゃん（市原悦子）の「ボウはええ子」というセリフが台本でも原作でも映画においても印象的な言葉として描かれているんですけど、“信じること”が人の気持ちを変えるんだなって。
この映画は、「“自然”と“人”。素材だけで勝負」というか（笑）。大きな事件が起こるわけでも、CGを使うわけでもなく、派手さはないですけど、最後にちゃんと大きなメッセージを受け取れるような作品になっていると思います。

Q. エンディングに流れる、秦基博さんが歌う「アイ」は恋愛の歌だと思っていたんですけど、この映画の最後に流れるとガラッと違う意味を持った曲に聞こえました。

愛の形とか、いろいろなことを考えさせてくれる曲で、素敵なエンディングでしたよね！最初に秦さんがエンディングを担当されると聞いた時は、「どんなエンディングになるんだろう？」ってワクワクしていたんですけど、試写を見た時に映画のいろんな部分とリンクして、最後に“ストン”と納得させてくれるというか、「しゃぼん玉」のエンディングに合った素敵な曲だったと思います。

目には見えない「愛」の大切さに気づける作品。

Q. 「美知」という女性を演じる上で、どんなことを意識されましたか？

美知は、あるトラウマを過去に持って自分の生まれ育った村に10年ぶりに戻ってきた女性です。そのトラウマの原因を自分の口で語るシーンはなくて、台本に書かれている出来事の「前」の話なんです。だから、「台本に書かれていないこれまでの美知の人生を、どうやって身体にしみ込ませて表現するか」を課題にしながら演じました。これは、この役に限らず、どんな役を演じるときも難しいですね。私はいつも、演じる役柄の人生の流れを「履歴書」のように書いてみたりして

います。今回演じた美知の場合は、過去に大きな不幸があった分、それをどうやって心に抱えながらお芝居するのかを常に意識していました。
ただ、背負っているのは暗い過去だけじゃなくて。村に対する愛情や、良い思い出もたくさんある女性なので、そのバランスを上手く取りながら演じました。特に、伊豆見君と出会ったことで動く心の動きは、大事に描きたいと思いましたね。映画で主に描かれているのは平家祭りの前後数日と期間が短いので、ガラッと雰囲気を変えるわけにもいかず…、そこが難しかったです。

Q. 映画「しゃぼん玉」をご覧になって、どんなことを感じましたか？

「人を信じる」という気持ちや、人と人との関わり合いの中にある「愛」の絶対的な大切さに気づける作品だと、試写を見終えて改めて感じました。目には見えない「愛」というものを、すごく素朴な形で、じんわりと伝えてくれる。それが、「しゃぼん玉」です。観たらきっと「実家に帰らなきゃ」とか「お母さんのごはんが食べたいな」と思わずにいられなくなると思います（笑）。ぜひ、たくさんの方に観に来ていただきたいです！

藤井 美菜さん出演映画最新作

しゃぼん玉

配給：スタイルジャム
原作：乃南アサ『しゃぼん玉』（新潮文庫刊）
主題歌：秦 基博「アイ（弾き語りVersion）」（OFFICE AUGUSTA）
脚本・監督：東伸児
出演：林遣都　藤井美菜　相島一之　綿引勝彦 ／ 市原悦子
©2016「しゃぼん玉」製作委員会
HP：http://www.shabondama.jp
2017年3月4日（土）シネスイッチ銀座ほか全国公開

直木賞作家・乃南アサのベストセラー小説、林遣都×市原悦子で待望の映画化！宮崎県の大自然を舞台に、感涙のドラマが誕生。

親の愛を知らず、女性や老人だけを狙った通り魔や強盗傷害を繰り返してきた伊豆見翔人（林遣都）。人を刺し、逃亡途中に迷い込んだ宮崎県の山深い椎葉村で怪我をした老婆スマ（市原悦子）を助けたことがきっかけで、彼女の家に寝泊まりするようになった。初めは金を盗んで逃げるつもりだったが、伊豆見をスマの孫だと勘違いした村の人々に世話を焼かれ、山仕事や祭りの準備を手伝わされるうちに、伊豆見の荒んだ心に少しずつ変化が訪れた。そして10年ぶりに村に帰ってきた美知（藤井美菜）との出会いから、自分が犯した罪を自覚し始める。「今まで諦めていた人生をやり直したい」――決意を秘めた伊豆見は、どこへ向かうのか…。

乃南アサさん 藤井美菜さん 直筆サイン入り
小説『しゃぼん玉』（新潮文庫刊）
抽選で2名様にプレゼント！

ご応募は日本ユースホステル協会ホームページの専用お申込みフォームから！
http://www.jyh.or.jp/hm/
■応募締切　2017年4月末日
※なお、当選発表は、商品の発送を以てかえさせていただきます。

提供：スタイルジャム　©原作：乃南アサ『しゃぼん玉』（新潮文庫刊）　©2016「しゃぼん玉」製作委員会